

土師神社考

萩原恭一

目 次

1	はじめに	523
2	土師氏研究について	523
3	土師氏の遠祖・天穗日命と土師氏の始祖・野見宿禰について	524
4	龍角寺古墳群周辺に所在する土師神社	526
5	土師神社の全国的分布について	528
6	『延喜式』記載の関連神社について	531
7	『和名類聚抄』に見る土師郷の分布について	533
8	おわりに	534

1 はじめに

本稿を書くきっかけは、カーナビゲーターを操作していた時に龍角寺古墳群のすぐ近くに「土師神社」が存在することに気づいたという、およそ学術性のかけらも無いまったくの偶然によるものであった。この土師神社は龍角寺古墳群中最大の方墳「岩屋古墳」（一辺78m）の東側、谷を挟んで500mほどのところにある。筆者は周辺の道路を日常的に車で通っているのだが、その神社の存在には全く気付いていなかった。さらにその後、千葉県立房総のむらの前身である房総風土記の丘資料館の友の会が刊行していた『印波』という会報に、「上福田の土師神社」という小文（房総風土記の丘友の会 1982）を見つけた時には、自分の勉強不足にほとんど呆れてしまったのであった。それから少し調べ始めてみたところ、龍角寺古墳群を中心とした半径10km程度の範囲内に全部で4社の土師神社が存在することが分かった。全国に無数に存在する八幡、天神、稲荷等の神社などと違い、どう考えても土師神社の存在は珍しいとしか思えない。しかも埴輪生産や古墳造営などをはじめとする古墳時代の葬制に深くかかわる土師氏との関連性が強いと考えられる土師神社が、千葉県内屈指の大型古墳群である龍角寺古墳群の周辺に4社もあることは純粋に驚きであった。これが本稿を書き始めた経緯である。

なお、本稿は特に何かの結論を導き出すことに目的はなく、分布やその他の関連する事項を検討することによって土師神社の実態を縷々記していくことに目的がある小論であり、まさに表題通り「土師神社考」である。

2 土師氏研究について

ここでまず、土師神社を考える上で重要となる土師氏について、その研究の大まかな流れを概観しておく。土師氏の研究は、今更述べるまでもなく直木孝次郎による「土師氏の研究」（直木 1960）で本格化し、その後何人もの研究者によりいくつもの論文が著わされている。まず、直木の研究から見ていく。直木の土師氏研究はその後の土師氏研究の基礎固めと言っても良いものである。『日本書紀』垂仁32年に記される有名な野見宿禰が埴輪を陵墓に立てることを進言した件については、直木は「土師氏がもと埴輪を作ることを任務としていたかどうかは問題であるが、喪葬すなわち凶儀に関係することを職務の少なくとも一つとしていたことは、認めてよいと思われる。」とし、さらに、『日本書紀』に記されている土師氏の職掌について①土器製造、②軍事、③外交、④その他に分類している。このうちの土器製造については「伴造としての土師連本来の職掌としては、天皇家のために土器を調進することと、天皇家を中心とする朝廷の喪葬に関与することの二つがあり（中略）土師連の本宗は、後者すなわち喪葬のことを主要な任務とすることになったのではないかと思われる。」とし、土師氏は「山陵造営をつかさどる」氏族であったと結論づけている。その後、いくつもの土師氏研究が見られるが、その多くは、菅原氏、秋篠氏、大枝氏への改姓の経緯とその後の各土師氏の推移についての研究が主なものである。その代表としては溝口優樹による研究が挙げられる（溝口2018）。溝口の研究は、単に改姓の経緯だけに留まらず、土師氏の中の職掌別のグループが存在することを史料から改めて確認している。また、館野和己の研究（館野 2019）も目を惹く。館野は本稿の「6『延喜式』記載の関連神社について」の項でも再度触れることではあるが、『播磨国風土記』揖保郡日下部里条の「立野 所以號立野者 昔 土師弩美宿禰（=野見宿禰） 往來於出雲国 宿於日下部野 乃得病死 爾時 出雲国人來到 連立人衆運伝 上川礫作墓山 故號立野 即號其墓屋 為出雲墓

屋」から、「土師氏は埴輪の製作だけではなく、墳墓の築造そのものに関与したということの意味しよう。」としている。さらに、『新撰姓氏録』に見える各土師氏の祖の多様性に注目し、「野見宿禰の後裔と称しているのは山城の土師宿禰と和泉の土師宿禰・土師連のみ」で「土師氏が決して一枚岩ではなく、その中がいくつもの集団に分かれ」、「各地に土師氏がいるといっても、本宗家から枝分かれしてからかなりの年月が経って、既にほとんど別の氏族のようになっていたものもあろう。」としている。

勿論、古代史だけではなく考古学研究者の側からも数多くのアプローチがなされている。考古学研究者側からは、実は先の直木孝次郎の論考よりも先に小出義治による研究が世に出ている（小出1951）。直木も先の論考の中で、小出の論考の存在を知らずにいたことを同稿の末文において詫びている。小出の研究は旧国の大和・河内・和泉の三国に限定しての研究ではあるが、1951年当時で知られる限りの埴輪生産遺跡を網羅し、さらに土師神社、土師郷、土師氏の分布等を文献史料だけではなく神社資料等からも検証している。次に挙げられるのは辰巳和弘によるものである（辰巳1993）。埴輪窯跡群が検出された奈良市菅原東遺跡の発掘調査の成果をもとに、土師氏研究と考古学の成果を結合させた論文を著している。その後の考古学研究者側のアプローチの代表としては日高慎の研究（日高2002）が挙げられる。日高の研究は、土師部（土師氏）の成立を何時に求めるべきかに主眼を置き、全国の埴輪生産遺跡を拾い上げ、埴輪生産遺跡の周辺の古代から近世にかけての土師関係地名、人名、さらに埴輪生産遺跡未確認地域の土師関連地名・人名を網羅した上で、分析を行っている。そして「畿内においては5世紀後半に、地方（関東）では6世紀中葉に土師部としての埴輪生産がはじまった。それには大量生産という組織化の必要性が深くかわってしよう。つまりそれぞれの地域で、変革の時期を経て土師部が成立し、その足跡として後世に土師関連地名がのこされることになったのであろう。」という結論を導き出している。そして最も直近の考古学側からの土師氏へのアプローチとしては、村瀬陸が中心となって行った一連の研究を挙げることができる（村瀬ほか2018・2021、村瀬2023）。特に、村瀬ほか2021においては村瀬をはじめとする総勢11名で共同研究を行っており、その中で、土師氏の本拠地の一つと考えられる奈良市菅原東遺跡の遺構及び出土遺物の検討、埴輪製作集団（＝菅原土師氏）の活動の検討から、土師氏の始祖である野見宿禰伝承の背景にまで踏み込んで論考を行っている。

本稿では、これらのうち小出のアプローチ手法に最も近い方法を取りながら、かつ、日高が集成した膨大な地名・人名のデータを援用させてもらいながら、土師神社やそれに関連する天穂日命神社、野見（野身）神社などのデータを付け加え、果たして神社の分布研究が考古学や古代史研究の上でどれくらい有効なのかも考えながら論を進めていきたい。

3 土師氏の遠祖・天穂日命と土師氏の始祖・野見宿禰について

土師氏の遠祖とされる天穂日命と、土師氏の始祖とされる野見宿禰とについて『日本書紀』からその記述を拾い上げて簡単に記しておく。

まず天穂日命である。『日本書紀』神代第六段に出雲臣や土師連等の祖であると記されている天穂日命は、同書神代第七段一書第三の記載によれば、素戔鳴尊が身に着けていた剣を天真名井に浮かべて剣の末を食いちぎり、吹き出した気噴の中から生まれたのが天穂日命であり、これは出雲臣、武蔵国造、土師連の遠祖であると記している。また、この時には合わせて五柱の男神が生まれ、天穂日命はその中の一番目の神である。さらに、『日本書紀』神代第九段本文では、高皇産靈尊が葦原中国を平定しようと考えた時

に最初に派遣したのが天穗日命であるが、天穗日命は大己貴神におもねり三年経っても復命しなかったと記している。さらに同書神代第九段一書第二では、高皇産靈尊が経津主神と武甕槌神を遣わして葦原中国を平定する時、大己貴神に対して「あなたが行っている現世の政治はすべて私の子孫が行うこととしよう。あなたは幽界の神事を行いなさい。あなたの行う幽界の祭祀は全て天穗日命にこれを掌らせる。」と伝え、大己貴神はこれに従ったという記述がある。

次に野見宿禰である。土師氏の始祖とされる野見宿禰については余りにも有名で、ここで改めて説明する必要も無いほどであるが、野見宿禰の名が『日本書紀』に最初に登場するのは垂仁7年7月条である。大和當麻邑の當麻蹶速との力比べに出雲国の野見宿禰が召喚され當麻蹶速と拵力（相撲）をとり、當麻蹶速を破りこれを踏み折いて殺してしまい、垂仁天皇から褒美として當麻蹶速の所領を下賜され、野見宿禰はそこにとどまるようになる。という、相撲の始祖としてのくだりである。

次に登場するのが『日本書紀』垂仁32年条である。垂仁28年10月条で、天皇の母弟倭彦命が亡くなりその近習が陵の境に生きたまま埋められ、なかなか死なずに昼に夜にうめき声が聞こえ、ついには腐り犬や鳥が集まり食い荒らすようになる。垂仁天皇はこのような風習はやめるように群臣達に言う。その後垂仁32年に垂仁天皇の皇后の日葉酢媛命が亡くなり、野見宿禰が「君王の陵墓に生きている人を埋め立てる代わりになることを奏上させてください」と進言し、出雲国から土部（はじべ）を百人呼び出して埴（はにつち）を取り人や馬などの形のものを作り天皇に献上し「これより後は土物（はに）を以て生きた人に替えて陵墓に立て、後世のきまり事としましょう」と申し上げた。垂仁天皇はこれを喜びその土物を日葉酢媛命の墓に立て、これを埴輪と名付けた。そして天皇は野見宿禰に鍛地を賜い、土部の職に任じ、野見宿禰の本姓を改めて土師臣とした。これが、土部連等が天皇の喪葬を掌ることのもとであり、野見宿禰は土部連等の始祖であるというもので、土師氏の氏族伝承としての有名なくだりである。

なお、野見宿禰にかかる記述ではないが、土師氏のなりわいに直接関わるものとして『日本書紀』に以下の二つの記述が見える。『日本書紀』雄略17年3月条「土師連等に対して、朝夕の御膳を盛るべき清器を進上せよと仰られた。そこで土師連の先祖の吾筥が摂津国の久佐々村、山城国の内村・伏見村、伊勢国の藤方村と丹波・但馬・因幡の私の民部を進上した。これを名付けて贄土師部という。」という土器作りに関わるものである。もう一つは、『日本書紀』白雉5年10月「(孝徳)天皇が正殿で崩御し、南庭に殯宮を建てた。小山上百舌鳥土師連土徳に殯宮のことをつかさどらせた。」という喪葬に関わる記事である。土師氏についてはその後も軍事、外交等の場面での記事が『日本書紀』には記されているが、極めてかい摘んで書けば、後に土師四腹と呼ばれるように、桓武朝になると土師氏からは菅原氏、秋篠氏、大枝氏へと改姓をしていく氏族が出て、菅原氏からは菅原道真が輩出され、大枝氏からは大江匡房等が輩出されるのである。

最後に、『日本書紀』ではなく、『古事記』においてそれぞれどのように記載されているのかについても見てみる。まず天穗日命については、上巻において「速須佐之男命が天照大御神の右の美豆良に纏っていた珠をもらい受け、噛み砕き噴き出した息吹から生まれたのが天之菩卑能命（＝天穗日命）」であり、「合わせて五柱生まれた神の中の二番目である」と記している。さらに、「天菩比命（＝天之菩卑能命（＝天穗日命））の子の建比良鳥命は出雲国造、无邪志国造、上菟上国造、下菟上国造、伊自牟国造、津島懸主、遠江国造等の祖である」と記している。そして土師氏については、中巻の久米伊理毗古伊佐知命（＝垂仁天皇）の最後の部分で「この天皇は御歳153歳で亡くなられた。御陵は菅原の御立野の中にある。また、

その大后比婆須比売命の（亡くなった）時、石棺作りを定め、又土師部を定めた。この後は狭木の寺間の陵に葬った。」と記している。

4 龍角寺古墳群周辺に所在する土師神社

ここで、本稿を書くきっかけとなった龍角寺古墳群の周辺半径10km以内に所在する土師神社について記す。龍角寺古墳群周辺の土師神社4社は以下の通りであり、番号は表1の土師神社一覧表と同じである。

- | | | |
|--------------------|-------------|--------|
| 1 所在地：成田市上福田 | 祭神：野見宿禰・埴安姫 | 立地：台地上 |
| 2 所在地：成田市郷部 | 祭神：天穗日命 | 立地：台地上 |
| 3 所在地：印旛郡栄町布太 | 祭神：野見宿禰 | 立地：低地 |
| 4 所在地：茨城県稲敷郡河内町羽子騎 | 祭神：野見宿禰 | 立地：低地 |

いずれの神社も祭神は「野見宿禰」もしくは「天穗日命」となっており、土師氏の遠祖とされる神や始祖とされる人物が主祭神となっていることから、社名と祭神の間に齟齬は無い。これらの4社の内、1と2は台地の上に立地しているのであるが、3と4の2社は低地に立地しており、古くからこの地において大型古墳群とその造墓に関わった集団や古代の氏族との直接的な関連性を持ってこの場所に存在したとは考えられない立地である。

まず3の栄町布太に所在する土師神社である。やや大きな島状の低地の北端に立地しており、神社の北側には大きな堤防を挟んで現在の利根川（かつては鬼怒川）が流れ、低地の南側には将監川という川が流れている。この一帯は、かつては水害で悩まされていた地域であり（千葉県総務部消防地震防災課 2010）、周辺は、輪中・水塚といった遺構が今も残っている地域である。地元栄町が行った神社棟札集成によれば（千葉県栄町1992）、この神社に残る最も古い棟札には正徳3（1713）年修造と記されている。

次に、4の茨城県河内町に所在する土師神社である。利根川を挟んで龍角寺古墳群からは北西に10kmほど離れた低地に立地している。茨城県神社庁のホームページの「茨城県河内町神社一覧」によれば、社名の読みは「はし」である。神社の南側の参道のすぐ目の前には新利根川が流れている。新利根川は江戸時代寛文年間の開削であり、この神社が立地する大字名の「羽子騎」は新田開発のために他地域から人々が移住して来てできた地名である。羽子騎の地名だけから考えても、現在の埼玉県羽生市、現在加須市に合併されている旧騎西町などが候補として挙がり、その故地としては利根川中流域の平野部が考えられるのである。

以上のことから、3と4の土師神社は立地的には古代の氏族との直接的なつながりを想定することは難しいことから除外するほかはないと考える。但し、ここで問題視しなければいけないのは、たとえ古くまでは遡れないにしても、3と4の土師神社については、そこに移り住んだ人々がどこの土師神社をこの地に勧請したのかということである。

そして、1と2が大型古墳群とその造墓に関わった古代の氏族との関連性が考えられる神社の候補として残ることになる。

まず、龍角寺古墳群に最も近い1の成田市上福田所在の土師神社について見てみる。『成田市史』（1972）には明治19（1886）年編纂の「町村誌料・下埴生郡南羽鳥村外五ヶ村」資料が収録されており、そこには「神社 土師神。所在 村の西南字天神。坪数 七拾八坪。祭神 野見宿禰。社格 村社。創建年代 不詳」と記されている。なお、同じく『成田市史』（1972）には「八生村誌」が収録されており、そこには「上福田



図1 龍角寺古墳群周辺の土師神社分布図



写真1 龍角寺古墳群周辺の土師神社 (左→右: 1→4)

に土師明神と云うあり。埴安姫を祭れる由なり。」と記されている。但し、千葉県神社名鑑(千葉県神社庁 1987)によれば、祭神は野見宿禰である。また、『日本歴史地名大系 千葉県の地名』には、土師神社は上福田村の鎮守で、元は土師明神宮と呼ばれており、天正2(1574)年の創立、と記されている。以上のことから、祭神は野見宿禰と記されているものと埴安姫と記されているものの二つが存在してはいるが、この土師神社を考えるうえで重要性を帯びるのはやはりその立地である。先にも記した通り、この神社を

中心に置くと、谷を挟んで西に500mの地点に龍角寺岩屋古墳、土師神社がのる台地と同じ台地上の南東600mには、やはり終末期方墳の上福田岩屋古墳（一辺31m）が存在している。周辺にはこのほかにも大竹古墳群が存在し、周知のとおり後期～終末期古墳群に囲まれた中にこの土師神社は存在しているのである。もう一つ重要なことは、この神社が存在する場所が古代の埴生郡に存在していることである。日高慎も指摘しているとおり（日高2002）、土師氏を考える上で「埴生」という地名はやはり重要であろう。土師氏が埴輪製作工人を組織・編成・統率していたとすれば、良質な粘土の存在は不可欠であり、埴生の地名はまさにそれを意味する地名だからある。古墳時代の終末期においては印波国造領域である「印波国」の中に含まれるのであるが、その後、印波国は「印旛評」と「埴生評」に分割され、龍角寺墳群を中心とした地域が「埴生評」後の「埴生郡」になるのである。

次に2の成田市郷部所在の土師神社について見てみる。現在、同神社は区画整理された美郷台と呼ばれる所に所在している。先の1の成田市上福田に所在する土師神社と同じく、『成田市史』（1972）に明治17年編纂の「下埴生郡郷部村誌」が収録されており、その中に「神社 土師神社。村の中央より寅の方に当たり、字南台。境内廿七坪。民有地。祭神 天穂日命」と記されている。このことから、区画整理以前から郷部地区に所在していた神社であることが分かる。「天穂日命」は先に記したとおりで、土師氏はその後裔であると称している。なお、この神社についても先の村誌名が「下埴生郡」であることからわかるように1の土師神社同様に旧埴生郡に所在する神社である。当該神社の南には、谷を挟んで瓢塚古墳群・天王船塚古墳群等で構成される公津原古墳群という大規模な古墳群が控えており、同古墳群最大規模の前方後円墳の船塚古墳（全長85m、方形二重周溝）が存在し、その近接地には千葉県内で2基だけ見ついている埴輪窯跡の内の「公津原埴輪窯跡」が存在していた。このことから、当該神社と古代の土師氏との関連性は十分に高いと考えられるのである。

最後に、成田市成田に所在する埴生神社についても記しておく。2の土師神社から南東500mほどのところに埴生（はぶ）神社が存在している。当該地域には、古代郡名の埴生（はにゅう）の遺称地が「埴生」もしくは「八生」で存在しているが、その読みはいずれも「はぶ」である。同じく『成田市史』（1972）に収録されている明治19（1886）年編纂の「下総国下埴生郡成田村誌」によれば、「祭神 埴山姫之命。鎮座暦年詳かならず」と記されている。先の「八生村誌」では成田市上福田所在の土師神社の祭神が「埴安姫」であると記されている。「埴安姫」は『古事記』において伊邪那美命が火之伽具土神を産み亡くなるまでの間に産む「波邇夜須毘賣神」のことである。『日本書紀』においてはこれが「埴山姫」と記されている。「埴安姫」とは、粘土を粘らせる女神という意味である（倉野1958）。いずれにしても、土師氏のなりわいであると考えられる「埴輪作り」、「土器作り」と深い関係があると考えられる。

5 土師神社の全国的分布について

次に、土師神社の全国的分布について概観してみる。表1が全国の土師神社の一覧表である。このほかにも大きな神社の中の境内社として土師神社が祀られているかもしれないが、筆者が拾い出せたものは全国で23社である。なお、ここに記した23社は正確に言うと土師の名を冠する神社であり、土師という地名のところにある神社であって厳密な意味での土師神社ではないものも含まれている。そのことについては以下に個別に述べる。

一覧表の1～4の土師神社は前項において既に述べた通りであるので、ここでの再述は省略する。

表1 土師神社一覧表

	都府県	市区町村	大字	祭神	備考
1	千葉県	成田市	上福田	野見宿禰	天正12年創立
2	千葉県	成田市	郷部	天穂日命	
3	千葉県	印旛郡栄町	布太	野見宿禰	正徳3年の棟札
4	茨城県	稲敷郡河内町	羽子騎	野見宿禰	
5	群馬県	藤岡市	本郷	野見宿禰	
6	栃木県	足利市	小俣	確認できず	社名：土師天神宮
7	埼玉県	久喜市	鷲宮	天穂日命ほか	鷲宮神社←土師宮神社の転訛か？「風土記稿」
8	東京都	渋谷区	神南	菅原道真	社名：土師家天満宮
9	長野県	大町市	常盤	天忍穂耳命ほか	別名：八王子神社
10	三重県	鈴鹿市	土師町	天之菩卑能命	延喜式神祇九 記載（伊勢国河曲郡）
11	三重県	鈴鹿市	土師町	埴山比賣神ほか	社名：西土師神社
12	京都府	京都市	北区上賀茂本山	建玉依比古命	社名：上賀茂神社 末社 土師尾社
13	京都府	福知山市	土師	菅原道真	社名：土師天満宮
14	大阪府	松原市	立部	弁財天	社名：土師弁財天
15	大阪府	藤井寺市	道明寺	菅原道真、天穂日命	社名：道明寺天満宮 本宮 土師社
16	兵庫県	たつの市	揖西町土師	保食神	
17	鳥取県	八頭郡智頭町	埴師	国之常見命・玉依姫命・スサノオ命・彦火々出見命・岐神他十七柱	明治初年「波瀨師神社」
18	鳥取県	八頭郡智頭町	下坂	天忍穂耳神ほか	
19	鳥取県	八頭郡八頭町	土師百井	大兔大明神	社名：土師百井神社（福本白兔神社摂社）
20	広島県	安芸高田市	八千代町土師	確認できず	社名：土師賽之神社
21	山口県	美祢市	美東町大田聞波	埴安姫	
22	山口県	山口市	吉敷上東	天穂日命、野見宿禰、応神天皇、菅原道真ほか	社名：土師八幡宮
23	福岡県	嘉穂郡桂川町	土師	大国主命・大物主命・事代主命・菅原道真	社名：土師老松神社

土師氏との関係で昔から注目されているものの代表に群馬県藤岡市の土師神社がある。「上野国神名帳」（国立公文書館デジタルアーカイブ）には緑埜郡17座の内の「従五位上 土師明神」と記されている。利根川水系烏川支川の神流川西岸の河岸段丘上に立地し、土師神社の北側わずか200mほどのところに国指定史跡本郷埴輪窯跡が存在している。また、土師神社から北西に4kmほど離れた烏川支川の鮎川西岸には猿田埴輪窯跡が存在する。本郷埴輪窯跡は2基の埴輪窯が知られており、操業時期は6世紀前半から6世紀後半と考えられる。猿田埴輪窯跡は4基の埴輪窯が検出されており、操業時期は5世紀後半から6世紀後半と考えられる。猿田埴輪窯跡は白石古墳群猿田支群に隣接して築かれている。藤岡地域での埴輪生産は5世紀後半には開始され6世紀後半まで続きその供給範囲は、藤岡市内は勿論、西は富岡市、安中市、北は前橋市、東は伊勢崎までを覆っていると考えられ、埴輪製作集団の活動基盤として長く存続していたことが考えられる（杉山・志村ほか2004）。なお、『和名類聚抄』には緑野郡土師郷が記載されており、この地を指していると考えられる。

同じく北関東の栃木県足利市には土師天神宮がある。群馬県藤岡市の土師神社同様に『和名類聚抄』には足利郡土師郷と記載されており、この地を指していると考えられる。足利市の土師天神宮の所在地は足利市小俣町であるが、すぐ東側には葉鹿町という地名が残っており、まさにこの地が土師郷であろうと考えられる。

埼玉県久喜市鷲宮に所在する鷲宮神社は、現在の名称は土師神社ではないが、祭神として天穂日命が祀られており、鷲宮は土師宮の転訛ではないかとの説も見られることからここに記載した。

東京都渋谷区神南の北谷稲荷神社には末社として土師家天満宮が存在している。『新編武蔵風土記稿』(国立公文書館デジタルアーカイブ)によれば北谷稲荷神社自体が文明年間(西暦1469~1487年)の駿河からの勧請であるとのことなので、この土師家天満宮はこの土地において古墳時代や古代の土師氏まで関連づけて扱うことはできないと考えられる。

長野県大町市常盤の土師神社は別名八王子五社神社で祭神は筆頭に天忍穂耳命が祀られているが、天穂日命も祭神として祀られている神社である。なお、天忍穂耳命は、『古事記』では正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命といい、天之菩卑能命(=天穂日命)が生まれた時の男神五柱の内の最初に生まれた神であると記している。

三重県鈴鹿市には土師神社が2社存在している。どちらも土師町(はぜちょう)に所在しており、西側に位置しているのは西土師神社と呼ばれており、東側に位置しているのが延喜式内社の土師神社である。全国の土師神社の中で『延喜式』に記載されている土師神社はこれのみである。

京都府内には土師の名を冠する神社が2社あり、一つは土師尾社(はじおのやしろ)で賀茂別雷神社(上賀茂神社)境内の末社で、祭神は建玉依比古命である。もう一つは福知山市土師(はぜ)に所在する土師天満宮であり、こちらは『和名類聚抄』における土師郷の分布でも触れるとおり、古代の土師郷に存在する土師の名を関する神社である。

大阪府内には土師の名を冠する神社が2社ある。一つは藤井寺市道明寺天満宮である。同社の旧名は土師神社であり、境内には元宮土師社がある。もう一つは松原市の土師弁財天である。河内国丹比郡土師郷がどこにあったのかを考える上で、この松原市土師弁財天の存在は問題になるのである。

兵庫県たつの市の土師神社は所在地の大字名が土師(はぜ)である。主祭神は保食神で、配祀神の中に野見宿禰がある。兵庫県神社庁によれば、その由緒は「初め保食神を祀る稲荷神社なりしも此地附近は往古土師の一族の居住したる地にして龍野町字日山に野見宿禰の墓と伝ふるものあり。しかも宿禰の霊を土師部落の十町南方なる大陣原神社といふに祀り今に大陣原神社附近に於て彼等土師の一族が焼き捨てたる埴輪圓筒の破片を多数発掘するなり。かくて大陣原神社を稲荷神社へ合祀すると共に附近の無格社(兵庫県神社誌)を合祀し以て明治41(1908)年頃現在地に移転し社名を土師神社と改称す。次いで大正9(1920)年2月村社に列せらる。」と記されている。

鳥取県には土師を冠する神社が3社存在し、全て八頭郡内にある。土師郷の分布の項でも記す通り、当地の地名の土師は『和名類聚抄』に記載されている土師郷に由来する。18の土師神社は私都川に面する小さな祠である。ここに記されている3社は土師郷との強い関わりは見られるものの、各社の祭神には土師氏所縁の祭神は全く含まれていない。

広島県は安芸高田市に土師の名を関する神社に、土師賽之神が存在する。江の川に設けられたダム湖の八千代湖の下流側の江の川沿いに小祠が建てられている。土師はこの地域の地名であり、八千代湖に設け

られているダムの名は土師ダムである。このことから、神社名に土師は冠せられているが、土師氏に関わる祭神を祀る土師神社ではなく、土師という地域に所在する賽之神神社である。

山口県には美祢市と山口市に1社ずつ存在する。美祢市に所在する土師神社は、境内の「土師神社之碑」によれば埴安姫を祀る神社である。山口市吉敷上東の土師八幡宮は、南側に市街地を見下ろす丘陵上にある神社である。祭神は天穂日命、野見宿禰、菅原道真で、八幡宮の名のとおり応神天皇も祭神の中に含まれている。

最後に九州地方では福岡県嘉穂郡桂川町土師に土師の名を冠する神社として土師老松神社がある。祭神の中に天穂日命や野見宿禰は含まれず、次の『和名類聚抄』に見る土師郷の分布において記す通り、この地は古代の土師郷であり、神社名は土師の地に所在する老松神社という意味である。

6 『延喜式』記載の関連神社について

全国の土師神社の分布を見ていく中で、唯一『延喜式』に記載されている土師神社として、伊勢国河曲郡に記載されていた現在の三重県鈴鹿市土師町の土師神社があることを記した。ここで、『延喜式』に記載されている神社の中から、社名等から土師氏との関連が深いと考えられる①天穂日命神社、②野見神社、③菅原神社を抜き出し、順に見ていく。

①天穂日命神社

『延喜式』には2社が記載されている。

一つは山城国宇治郡に記されている京都市伏見区石田森の天穂日命神社で、淀川水系の宇治川に注ぎ込む山科川の南岸に立地している。伏見の地は、先に『日本書紀』雄略17年3月条でも触れた通り、山城の国伏見村から贅土師部を進上しており、この地の天穂日命神社の存在と土師氏との関連性は十分に強いと考えられるのである。

もう一社は因幡国高草郡に記されている鳥取市福井に所在する天穂日命神社である。鳥取市の市街地の西側にある海跡湖として知られる湖山池に向けて西側から開ける開析谷の北側斜面に祀られている神社である。

②野見神社

『延喜式』には、野見神社、野身神社、大野見宿禰命神社の3種4社が記載されている。

摂津国嶋上郡に記されている野身神社について見てみると、古代の嶋上郡に該当する現在の大阪府高槻市内には野身神社が2社ある。一つは、高槻城三の丸北郭の中にある野見神社である。こちらは城の三の丸の中にきれいに納まっていることから考えても、この後に記す天神町に所在する野身神社が式内社の野身神社と考えるのが妥当であろう。そのもう一つの野身神社は高槻市天神町に所在する野身神社で、淀川の北西に3kmほど離れた低丘陵上にあり、上宮天満宮の南に隣接する。境内の石柱には「式内社野身神社并野身宿禰墳」と記されており、社殿は宿禰塚古墳の上に建てられている。すぐ南側には有名な昼神車塚古墳、西に2kmほど離れて今城塚古墳、同じく西に3kmほど離れて新池埴輪製作遺跡があり、新池埴輪製作遺跡の製品は今城塚古墳、昼神車塚古墳の双方に供給されている。塚口義信は、新池埴輪製作遺跡は『日本書紀』欽明23年条の「(今、新羅人の居住する)撰津国三嶋郡埴盧(はにいお)」に該当するとしている(塚口1998)。

尾張國中嶋郡に記されている野見神社は、現在の一宮市今伊勢町に所在する野見神社である。一宮市の

表2 『延喜式』記載の関連神社一覧表

①天穂日命神社

	都府県	市区町村	大字	社名・祭神	延喜式所載事項
1	京都府	京都市	伏見区石田森西	天穂日命	延喜式神祇九 山城国宇治郡
2	鳥取県	鳥取市	福井	天穂日命、熊野久須毘命、保食命	延喜式神祇十 因幡国高草郡

②野見神社

	都府県	市区町村	大字	社名・祭神	延喜式所載事項
1	大阪府	高槻市	野見町	野身神社	延喜式神祇九 摂津国嶋上郡 現野見神社
2	愛知県	一宮市	今伊勢町	野見神社 祭神：野見宿禰、天穂日命	延喜式神祇九 尾張国中嶋郡
3	愛知県	豊田市	野見山町	野見神社 祭神：野見宿禰	延喜式神祇九 参河国賀茂郡
4	鳥取県	鳥取市	徳尾	大野見宿禰命神社	延喜式神祇十 因幡国高草郡

③菅原神社

	都府県	市区町村	大字	社名・祭神	延喜式所載事項
1	奈良県	奈良市	菅原東	現菅原天満宮 祭神：天穂日命、野見宿禰命、菅原道真	延喜式神祇九 大和国添下郡 菅原神社

(参考) 延喜式記載以外の現存の野見宿禰神社

	都府県	市区町村	大字	社名・祭神	延喜式所載事項
1	兵庫県	たつの市	北龍野	野見宿禰	播磨国風土記の出雲墓屋伝承地 境内に野見宿禰塚あり
2	東京都	墨田区	亀沢	野見宿禰	明治17年創建

市街地の北東に位置し、木曾川からは3 kmほどの距離を置いた場所である。

参河国賀茂郡に記されている野見神社は、現在の豊田市野見山町に所在する野見神社である。矢作川東岸の丘陵内に立地している。

最後に、因幡国高草郡に記されている大野見宿禰命神社は、現在の鳥取市徳尾に所在する大野見宿禰命神社である。鳥取市の市街地の西側の千代河西岸の残丘状の丘陵上に立地している。

③菅原神社

『延喜式』に菅原神社として記載されているのは、大和国添下郡に記載されている菅原神社、現在の奈良市菅原東に所在する菅原天満宮1社のみである。ここはまさに、土師氏から菅原氏へと改姓した氏族の本拠地と考えられる場所である。菅原天満宮の400m東には5世紀後半から6世紀に操業した埴輪生産遺跡の菅原東遺跡が、600mほど南には宝来山古墳(垂仁陵)がある。また、北に1.3kmほど離れたところには、同じく土師氏から改姓した秋篠氏の本拠地と考えられる奈良市秋篠町がある。そして、東に4.5kmほど離れたところには、5世紀前半には埴輪生産を開始していたと考えられる平城宮東院下層埴輪窯が存在する。このように、奈良市菅原天満宮は古墳時代から古代にかけての土師氏との密接なかわりかき場存在する場所である。なお、現在の全国の天神信仰の神社数は國學院大學が行った統計(岡田・加瀬 2007)では、全国79,000を超える神社の内の第3位(3,900社余り)を占めており、しかもさらにそ

の中の菅原神社を名乗る神社に限ってみても全国で第18位の社名数を数えるのである。このことは、『延喜式』に見える菅原神社がわずか1社であることとは大きくかけ離れており、その後の天神信仰の隆盛を物語っているといえる。

『延喜式』に記載されている関連神社は以上であるが、ここで、『延喜式』には記載されていないが、現在存在している「野見宿禰神社」についても記して置きたい。一つは兵庫県たつの市北龍野に所在する野見宿禰神社である。当該神社境内に野見宿禰塚がある。『播磨国風土記』揖保郡日下部里条に「立野 所以號立野者 昔 土師弩美宿禰 (=野見宿禰) 往来於出雲国 宿於日下部野 乃得病死 爾時 出雲国人来到 連立人衆運伝 上川礫作墓山 故號立野 即號其墓屋 為出雲墓屋」と記されており、この野見宿禰神社境内の野見宿禰塚が同書に記されるところの土師弩美宿禰の墓「出雲墓屋」であるとされるのである。野見宿禰の墓所と伝えられるものには、先に記した鳥取市徳尾の大野見宿禰命神社の他に、松江市菅原天満宮、高槻市上宮天満宮等がある。もう一つの野見宿禰神社は東京都墨田区亀沢に所在する野見宿禰神社である。両国国技館の東600mほどのところに位置しており、こちらについては明治17(1884)年創建であることがはっきりしており、古代の氏族である土師氏に由来する神社ではなく、相撲の興行に絡めて相撲の始祖でもある野見宿禰を祀るために明治期に設けられた神社であることは明白である。

7 『和名類聚抄』に見る土師郷の分布について

先に、群馬県藤岡市土師神社、栃木県足利市土師天神宮のところで『和名類聚抄』に土師郷の地名が見られることを記したので、ここで改めて『和名類聚抄』に記載される全国の土師郷をまとめたのが表3である。同書の記載順ではなく、日本列島を北東から南西に進むようにまとめてみた。『和名類聚抄』には全国で12の土師郷が記載されている。東国は先の群馬県藤岡市の上野国緑野郡土師郷、栃木県足利市の下野国足利郡土師郷が東端であり北端である。

畿内では和泉国に1郷、河内国に2郷が記載されている。和泉国の土師郷は大鳥郡にあり、現在の堺市のかなりの範囲と隣接する高石市がその範囲であると考えられる。ニサンザイ古墳の南側には「土師(は

表3 『和名類聚抄』所載の土師郷一覧表

	国名	郡名	訓	遺称地・伝承地・想定地
1	上野国	緑野郡	はにし	群馬県藤岡市
2	下野国	足利郡	訓欠	栃木県足利市
3	河内国	志紀郡	訓欠	大阪府藤井寺市
4	河内国	丹比郡	訓欠	大阪府松原市 又は 大阪府堺市東区
5	和泉国	大鳥郡	はにし	大阪府堺市・高石市
6	丹波国	天田郡	訓欠	京都府福知山市
7	因幡国	八上郡	訓欠	鳥取県八頭郡郡家町
8	因幡国	知頭郡	訓欠	鳥取県八頭郡智頭町
9	備前国	邑久郡	はし	岡山県邑久郡長船町
10	阿波国	名方西郡	はし	徳島県名西郡石井町、徳島市
11	筑前国	穂浪郡	はし	福岡県嘉穂郡桂川町
12	筑後国	山本郡	訓欠	福岡県久留米市

ぜ) 町」が町名として残っている。当然のことながら百舌鳥古墳群はこの大鳥郡の中にあり、その中で土師郷と考えられるのは、まさに百舌鳥古墳群を中心とする地域である。次に河内国に2か所記載のある土師郷について見てみる。最初に丹比郡土師郷についてであるが、この比定地は現在2か所ある。先の和泉国大鳥郡土師郷の東に隣接する現在の堺市東区の、町名に日置荘のつく地域一帯が丹比郡土師郷であろうとする説がまず一つ(吉田1900)。現に、日置荘西町から日置荘田中町にかけての場所には日置荘遺跡があり、そこからは埴輪窯跡が検出されており、その可能性は十分にあり得ると考えられる。が、もう一つ、それとは別に先の土師神社の分布の所でも記した通り、松原市立部付近が丹比郡土師郷であった可能性もある。松原市立部のすぐ北側には古市古墳群の北西端に位置する河内大塚山古墳が存在する。そして河内国にあったもう一つの土師郷は、志紀郡土師郷で、現在の藤井寺市の道明寺周辺と考えられる。道明寺は古名が「土師寺」であり、土師神社の分布でも見た通り道明寺に隣接して道明寺天満宮があり、境内には元宮土師社がある。古市古墳群の仲津山古墳、市野山古墳、そして誉田御廟山古墳に近接しており、誉田御廟山古墳の南400mの地点には誉田白鳥埴輪製作遺跡が、また道明寺天満宮から南西へ2.5kmほどの地点には野々上埴輪窯跡が存在する。このように、土師氏にとってはまさに拠点的な場所である。このように、和泉国と河内国にある三つの土師郷は、古市古墳群から百舌鳥古墳群に至る広い地域に、若干の空白域は存在するものの、土師氏が拠点的に居住しており、三つの土師郷が連なるように存在していたと考えられるのである。

次に丹波国天田郡土師郷である。天田郡は現在の福知山市の大部分が該当すると考えられる。土師神社の分布のところでも記した通り土師天満宮が存在する。

因幡国には八上郡と智頭郡に土師郷が記載されている。八上郡土師郷は現在の八頭郡郡家町に土師百井神社があり、この周辺が古代の土師郷であったと考えられる。また、智頭郡土師郷は現在の八頭郡智頭町に土師神社があり、この周辺が古代の土師郷であったと考えられる。

備前国には邑久郡土師郷が記載されている。現在の邑久郡長船町に土師の地名が残っており、この周辺が土師郷であったと考えられる。

阿波国には名方郡に土師郷が記載されている。現在の徳島市西部から名西郡石井町周辺にかけてかと思えるが、地名の土師や土師神社等は現存しておらず、特定が難しい。

筑前国穂浪郡に土師郷の記載がある。土師神社の分布においても記した通り、嘉穂郡桂川町に土師という大字名があり、ここに土師老松神社が存することから、この周辺が古代における土師郷であったと考えられる。

最後に、筑後国には山本郡に土師郷が記載されている。現在の久留米市かと思えるが、遺称地は未詳である。なおこれはあくまでも参考にしか過ぎないが、久留米市の東に位置する朝倉郡東峰村に土師山という山が存在する。

8 おわりに

以上、龍角寺古墳群の周辺に存在する4社の土師神社を考察するために、全国の土師神社、『延喜式』に見える関連神社、『和名類聚抄』に見える土師郷等について縷々述べて来た。本稿において神社にこだわったのは、出発点が土師神社であったという極めて単純な理由である。その結果、土師氏の分布や古代土師郷の分布とはきれいに結びつかない土師神社も何社も見られたが、やはり、古代土師氏、土師郷との

結びつきを見ることができる土師神社が多かったことも確認できた。その上で、本稿を書く契機となった龍角寺古墳群の直近に存在する土師神社についてであるが、考古学的な観点からは十分に関連性が高いと考えられるが、文献史料等からは土師氏の分布とも土師郷とも直結できないもどかしい存在であることも再確認できた。ただし、埴生郡に所在し、埴生神社も周辺に存在するなど、土師氏のなりわいの一つと考えられる「埴輪作り」、「土器作り」との関連が考えられる遺跡・地名・神社が色濃くまとわりついているという事実は、傍証根拠にしかならないとしても、やはり無視はできない根拠材料であろうと考えられる。

それにしても、土師神社はやはり珍しい存在であることも改めて実証できたと思う。社名に地名の「土師」を冠としてつけているものも含め全国で23社しか確認できない土師神社は、やはり特殊な存在であると言わざるを得ない。そして、「そもそも、神社とは一体何なのか？」と改めて考えてしまうのである。岡田荘司は「古代の神社は、共同体の祭祀によって氏神・土地の神（地主神）が祀られ、それを祀る人々は、個人的信仰のために祈願することは少なかった。…しかしその後、平安中期以後は…古代的基層形態（「氏神型信仰」）と中世的発展形態（「勧請型信仰」）との二形態が共存する中で、神社信仰を形成していった。」と記し、さらに「中世末期から近世にかけて開発された村落にも、神明、天神、稲荷などの神社が数多く創建されており、現在ある神社はこの頃の創祀になるところが多い。」とも記している（前掲、岡田・加瀬2007）。同書では触れていないが、明治政府による神社政策の中での社格の位置づけや、その後の一村一社の合祀等を経ての神社の変容というものも当然あるはずである。そのような変化を経てもなお、全国に8万社弱存在する神社の中にわずかとは言え「土師」を社名に冠し野見宿禰や天穂日命を祭神として祀る神社が存在していることに、逆に驚きを覚えてしまうのである。勿論その中には、龍角寺古墳群の周囲に存在する4社の中の印旛郡栄町布太所在の土師神社や、茨城県稲敷郡河内町羽子騎所在の土師神社のように、どう考えても古代までは遡れず、逆に岡田荘司のいう江戸時代以降の開発村落での創祀と考えられる土師神社が存在するわけである。それでもその場合には、先に記した通りそこに勧請した元の土師神社はどこにあった土師神社なのかということが大きな問題になることも、改めて浮き彫りになった。

最後に、本稿を作成するにあたっては、平凡社『日本歴史地名大系』の内、北海道と沖縄県を除く全巻を検索し必要部分を参考資料として利用したが、以下の引用・参考文献にその一々を記すのは膨大になるため、ここにその旨を記して置くに留める。さらに、その検索によって得られた各土師神社や関連神社については、本来であれば自分の脚で一々を巡り歩いてその立地等を確認した上でここに記すべきであろうが、龍角寺古墳群周辺の土師神社4社以外については、Google Map とその Street View の機能を最大限に活用して立地の確認等を行ったことを記して置く。

引用・参考文献（五十音順）

- 秋本吉郎校注 1975『日本古典文学大系 風土記』岩波書店
 池田源太 1974「土師氏の分布について」『青陵』No.24 榎原考古学研究所
 池邊彌 1966『和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館
 岡田荘司・加瀬直弥編集 2007『現代・神社の信仰分布 - その歴史的経緯を考えるために - 』國學院大學21世紀COEプログラムセンター
 倉野憲司・武田祐吉校注 1958『日本古典文学大系 古事記 祝詞』岩波書店
 小出義治 1951「大和・河内・和泉の土師氏」『國史學』第54号 國史學會
 榊佳子 2008「古代における天皇大葬管掌司について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第141集 国立歴史民俗博物館

土師神社考

- 坂本太郎ほか校注 1967『日本古典文学大系 日本書紀 上』岩波書店
坂本太郎ほか校注 1965『日本古典文学大系 日本書紀 下』岩波書店
杉山晋作・志村哲ほか 2004「【第2部】猿田Ⅱ遺跡の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集 国立歴史民俗博物館
辰巳和弘 1993「埴輪の起源説話」『季刊考古学 別冊4 考古学から古典を読む』雄山閣
館野和己 2019「古代土師氏考」『百舌鳥・古市古墳群と土師氏』大阪府立近つ飛鳥博物館
千葉県栄町教育委員会 1992『千葉県印旛郡栄町神社棟札集成』
千葉県神社庁 1987『千葉県神社名鑑』
千葉県総務部消防地震防災課 2010『防災誌 風水害との闘い』
塚口義信 1999「天皇陵の伝承と大王墓と土師氏」『網干善教先生古稀記念考古學論集』下巻 網干善教先生古稀記念会
坪之内徹 1987「土師氏考」『日本書紀研究』第十六冊〈宗教・思想篇〉 塙書房
直木孝次郎 1960「土師氏の研究」『人文研究』11巻9号 大阪市立大学文学会
成田市役所 1972『成田市史 近代編 資料集1 (旧町村史)』
日高慎 2002「埴輪の生産と土師部の成立」『季刊考古学』第79号 雄山閣
房総風土記の丘友の会 1987「上福田の土師神社」『印波』No.9
前川明久 1969「土師氏と帰化人」『日本歴史』第255号 日本歴史学会／吉川弘文館
前川明久 1978「土師氏伝承の一考察」『日本歴史』第364号 日本歴史学会／吉川弘文館
溝口優樹 2018「土師氏の改姓と菅原・秋篠・大枝氏の成立」『ヒストリア』第270号 大阪歴史学会
村瀬陸ほか 2018『奈良市の埴輪-土師氏の故郷での埴輪生産-』奈良市教育委員会
村瀬陸ほか 2021『研究紀要』第25集 公益財団法人由良大和古代文化研究協会
村瀬陸 2023「埴輪の復古再生と土師氏」『器物の「伝世・長期保存」「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持』島根大学法文学部
吉田東伍 1900『大日本地名辞書』富山房
米澤康 1961「土師氏の改姓（上）（下）」『芸林』12-5、6 芸林会
各都府県神社庁ホームページ
国立公文書館 デジタルアーカイブ『上野国神名帳』、『新編武蔵風土記稿』
国立国会図書館 デジタルコレクション『倭名類聚鈔』